



中高生とともに差別と闘う

『ユウの卒業』

吉成タダシ (うずしおブランチ代表)



「マリアの本音」の続きです。

*

一人一人が主役の卒業メッセージが過ぎ、冬になっても、子どもたちは人権学習を繰り返し、積み重ねていきました。それは受験期だからといって受験勉強に振り替えられることもなく、卒業直前まで当たり前のように続けられていきました。

でも子どもたちは、受験勉強もよく頑張りました。一人一人もよく頑張りました。支え合い、教え合い学習を積み重ねていきました。

全体学習(みんなで語り合う人権学習)を経験した教え子が、二十数年をふり返りこう語ってくれたことがあります。

「全体学習をして学力が上がった理由は二つ。一つは、分からないことが分からないと言え関係になったこと。もう一つは、誰一人落ちこぼさないという思いが強かったこと」

この子たちも、互いの中にある「思い」がよく見えていたからこそ、「みんな」でと思えたのだと思います。

翌年の春、卒業式。生徒代表による答辞は行いませんでした。代わりに、卒業生全員一人一人が、「卒業メッセージ」を述べていきました。

先の授業の最後で、「やっぱり逃げたら駄目だなんて、思いました」と発言した子は、同級生や在校生、保護者に向けて、こんなメッセージを残しました。

「ボク、みんなのこと大好きです。普

通卒業式で、こんなところで歌うたたりはないです。そういうところが大好きです。そのまま育つていってほしいと思います。どこでも、社会に出て、自分らしく、生きていってほしいと思います。ありがとうございしました」

ユウの卒業

実は彼のメッセージの直前、友達のユウが、メッセージのなかで歌をうたいはじめたのです。

「ボクが去年病院に入院した時、家から何キロもあるのに、自転車でお見舞いに来てくれた友達がいきました。」

二年生の時、担任に吉成先生がなった時、うざったい人だなと思いました。今もその気持ちに変わりはありません(笑)。ですが、今は同時に先生方に感謝しています。ここに集まってくれたみなさん、先生方、友達に、感謝の思いを込めてうたいたいと思います。みなさん、ボクの後に続いてうたってください」

突然の展開に、式場はざわめきました。私も困惑しました。

ユウはうたいはじめます。

「この道は、いつか来た道

ああそうだよ

アカシヤの花が咲いてる」

来賓の方々も保護者の方々も、驚きながら戸惑いながら、それでも彼の後について口ずさみましました。

母子家庭で、不登校に陥ってしまったユウ。それでも毎朝、毎夕、顔をのぞきに私は家へ向かいます。

中学最後の運動会直前、ユウは体調を崩し、緊急入院してしまいました。何もできなくても見に行きたい、と言う彼の言葉に、私は担当医に願ひ出るのですが、「彼は入院してるんですよ」と、逆にこっぴどく叱られました。

肩を落として病室に戻り、ユウに「すまん」と言うと、彼はひと言、「先生、ありがとう」とつぶやきました。逆にその言葉が切なくて。

その約一ヶ月後には文化祭がありました。せめて文化祭にはと、私も友達も、総力を挙げて彼をサポートしました。劇の練習なんてまったくできていません。それでも舞台に立たせようと、みんなで創意工夫をこらします。そしてやっこのことで、ユウは舞台上立ち、立派に演じたのです。

卒業式後談があります。それは、なぜ「この道」をうたったのか。それが分かるまでに、私はずいぶんと時間がかりました。

彼らが中学二年が終える時、前任の校長先生が定年退職されました。卒業式の後、数ヶ月経ったころ、その校長先生の家に遊びに行つたときのこと。一緒にランチしながら、当時を偲んでおしゃべりをしていました。

卒業式の話になったとき、「ユウが歌をうたいたして」と言うと、音楽が専門だった校長先生は、

「あら、何の歌？」

「それが、『この道』なんですよ」

と、何気なく笑って言う私に、ひと言

「あら、私が離任式の時にうたった歌じゃない」と。

「えっ」

瞬時に笑みが凍りつきました。そんなことをまったく忘れてしまっていた私は、心底情けなく思いました。ユウは、一年前に去って行った前校長先生を偲び、卒業式でうたっていたのです。

後日、ユウに真意を確かめると、何事もなかったかのように、にこやかに「知らなかったの？」と微笑みました。どうして子どもたちはこんなにもやさしく、素敵なんでしょう。

一時は、不登校で手がつけられず、腫れ物でも触るかのような扱いを受けていたユウ。家では母親に邪魔者扱いをされ続けていたユウ。それでも彼は、ちゃんと自分の気持ちに折り合いをつけ、感謝の気持ちを忘れることなく成長していったのです。

子どもたちの内面は計り知れませんが、まだまだ子ども、と思うこともあります。でも、子どもたちは大人が思う以上に、すなおに、純粋に、まっすぐに生きていこうとします。

大人が期待すれば、期待に添えるように。励ませば、持てる力の全力で。信じれば、その信頼に応えようと、まっすぐにまなざしを向けてくれます。だからこそ大人は、それを裏切るような存在であってはならないのだと思います。子どもたちのまっすぐなまなざしを、まっすぐに受けとめられる自分であり続けたいと思います。